

大分港

大分県土木建築部港湾課

〒870-8501 大分市大手町3-1-1

☎097-536-1111(代)

URL : <http://www.pref.oita.jp/17300/index.html>



1. 概況

〈地勢、沿革〉

大分港は、九州の北東部、別府湾南岸に位置し、気候温順、海上静穏で自然条件に恵まれている。海上においては京阪神、四国地方と連絡し、陸上においては東九州自動車道、大分自動車道、中九州横断道路の分岐点として九州における東の玄関口の位置を占めている。

本港は約400年前、時の領主であった大友宗麟がポルトガルや明との交易を行った由緒ある港で、フランシスコ・ザビエル来航時は我が国でも有数の貿易港の一つであった。その後、明治末期から築港工事が進められ、阪神、四国方面との定期航路の開設等、次第に海上交通路の要衝となってきた。

昭和34年に開始された大分鶴崎臨海工業地帯の造成により、本港の港勢は東へと拡大され、大野川以西の住吉、乙津、鶴崎、及び、大野川以東の大在、日吉原の各地区に公共岸壁や泊地が相次いで完成し、また、立地企業の専用埠頭の整備も進んで、本港は近代的な大型工業港湾へと変貌した。

〈現況〉

本港は港湾整備の伸展に伴って、取扱貨物量、入港船舶量などが順調な伸びを示し、特に臨海工業地帯に立地した各企業の操業開始によってその伸びは飛躍的なものとなり、現況は次のとおりである。

〔西大分地区〕

戦前から大分港と呼ばれ、阪神、四国方面への海上交通の基地として栄え、本港の拠点として発展してきた。昭和45年から西大分地区を基地としてカーフェリーが就航しており、神戸港との間で1日1便が運行されている。平成18年にはフェリーの就航箇所を東側の既設埠頭へ移し、旧フェリー埠頭の再開発に着手した。現在では、緑地広場が整備されるとともに、旧上屋を活用した商業施設が建ち並び、様々なイベントが一年を通じて行われる賑わい溢れる空間となっている。また、現在のフェリー埠頭については、震災時の緊急物資輸送にも対応できる、耐震強化岸壁への改良工事が平成29年3月に完成した。

〔住吉地区〕

昭和40年代前半から臨海工業地帯の建設に伴って整備され、15,000トン級船舶の接岸が可能な岸壁やその他多くの係留施設を有している。主に、金属くず、非金属鉱物などの輸

出入やセメントの移入等が行われており、関税法に基づく保税地域として指定された荷さばき地と保税上屋も設置されている。

〔乙津地区〕

昭和45年に公共埠頭が建設され、現在では化学薬品や金属くず等の内貿貨物を取り扱われている。泊地の両岸には企業の専用係留施設が対峙し、沖に向かっては大型シーバースなどが設置されている。昭和50年の港湾合同庁舎の完成により、今までの散在していた海事関係機関が集約され、これに隣接して通船待合用の埠頭ビルが建設されている。

〔鶴崎地区〕

従前は鶴崎港と呼ばれていたところで、大分鶴崎臨海工業地帯の造成に伴い奥深い入江の良港となっている。公共埠頭が東西に存在し、セメントの移入等の内貿貨物を取り扱っている。また、周辺には各企業の専用岸壁やドルフィンが設置されている。

〔大在地区〕

新産都二期計画の一環として、大規模な公共埠頭(埋立面積78万8千㎡)を造成するため、昭和47年から建設に着手しており、水深14~45mの岸壁17バース、小型船舶を対象とした浮きさん橋(7基・140隻)が完成している。このうち、平成8年に供用を開始したコンテナターミナルは水深14m岸壁、水深10m岸壁各1バースとコンテナクレーン2基を備え、韓国、中国向けの外貿定期コンテナ航路が週6便、神戸港との内貿定期コンテナ航路が週3便就航している。

また、水深7.5m岸壁には、RORO船が関東方面に2航路(週9便)就航しており、本地区は大分港の物流拠点となっている。

〔大在西地区〕

増大する貨物や船舶の大型化及び埠頭用地の不足など大在地区での問題を解消するため、新たに水深9m岸壁を整備する計画である。

〔日吉原地区〕

大在公共埠頭の補完として昭和52年に着手し、現在までに水深7.5m~5.5mの岸壁5バース、小型船舶を対象とした浮きさん橋(13基・411隻)が完成している。

〔その他〕

本港の背後には、幹線道路である臨海産業道路が西大分地区から日吉原地区まで貫通しているが、引き続き国道197号へ接続するため、東側へ延伸する事業を進めている。